

# 柗の花咲くころ

北村 豊

昨年も、私の診療所のヒイラギ（柗）が11月より12月初めにかけて、白くて小さな花を沢山咲かせ、秋から冬の季節の到来を知らせてくれた。

私は秋には特に学会等で多忙で、日本の豊かで繊細な季節感からは、もったいないことに遠のいてしまっていた気がしている。これらの四季折々の自然の移ろいや伝統行事は、時間に追われる現代の生活に豊かな時の流れをもたらしてくれるのだが…

ヒイラギは、古都奈良で育った私には、郷愁を呼び起こす樹木でもある。それは今では日本の多くの地方ですたれてしまった、玄関の柱に飾られていた鯛の頭を刺した葉付きのヒイラギの枝を、葉の棘が邪気を退けると伝承されて見慣れた風景として育ったから

あろう。

和名のヒイラギは、葉縁の棘に触れると痛くてヒリヒリし、「疼」の漢字を用いて「疼ぐ（ひいらぐ）」と古くは発音したそう、これが和名の由来である。



雌雄異株で、私の診療所では結実しない雄株が咲いている。男女共同参画の社会に見習って、いずれは結実する雌株を植えて彩を添えたいと思っている。

日本原産のヒイラギに対し、日本人に最もなじ

み深い花の香りは、近縁種の中国原産のキンモクセイであろう。この花は、甘くて強い香気を漂わせることから、日本においては汲み取り式便所が主流で悪臭を発していた時代にはその近くに植えられることもあった。そのため、かつてはその香りがトイレの芳香剤の主流をなしていたこともあり、パブロフの条件反射のように、私を含め一部の年齢層にはトイレを連想させることも多いようである。

ヒイラギは老木になるにつれて葉の棘が無くなる傾向にあり、小布施町の樹齢700年の県天然記念物の巨木のヒイラギの葉は、丸みを帯びて棘は全く見られない。

無い物ねだりだが、キンモクセイに勝るヒイラギの清楚な花の芳香の品格と、この老木の葉のような丸みのある性格を私は持ちたいと願っている。（医療法人信州口腔外科インプラントセンター所長）